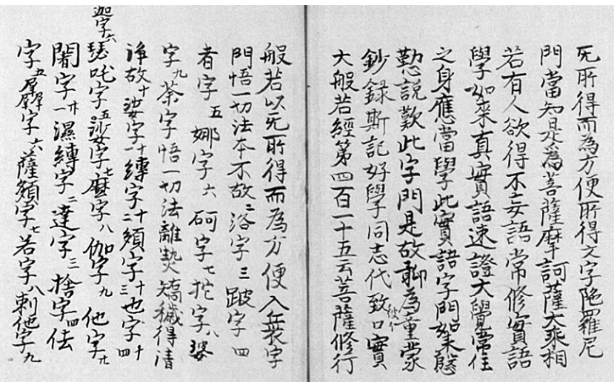
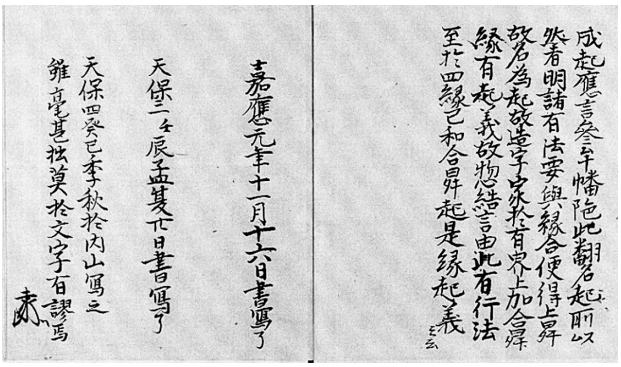
『梵字悉曇字母并釋義』と『悉曇釋』引用説
―付・高野山大學圖書館所蔵『梵字悉曇字母并釋義 御作』翻刻本―

大柴　清圓



＜圖１＞『梵字悉曇字母并釋義 御作』（高野山大學圖書館所藏）「代致（彼）口實」の後に、「大般若經第四百一十五云」と續く。



＜圖２＞『梵字悉曇字母并釋義 御作』本奥書・書寫奥書

はじめに

弘法大師空海（774-835、「大師」と略稱す）が撰した『梵字悉曇字母幷釋義』（『悉曇字母釋義』と略稱す）は、現行の諸々の弘法大師全集に載せられている。それらは等しく一巻であり、「代彼口實」で終わっている[1]。しかし、高野山大學圖書館所藏（高野山三寶院寄託）の『梵字悉曇字母幷釋義　御作』（『御作』と略稱す）は「代彼口實」にて終わらず、それ以降にも文章が續いている。小論は『悉曇字母釋義』は元來二巻であり、その第二巻は『悉曇釋』であったとする運敞説に同意し、その内容が『御作』「代彼口實」以降に相當することを推論するものである。

1　『梵字悉曇字母幷釋義』の二巻説

1．1　「梵字幷びに雜文を獻ずる表」（『性靈集』巻第四）で獻上された書物

『悉曇字母釋義』は「梵字幷びに雜文を獻ずる表」（『性靈集』巻第四）の中に見られる。

沙門空海言す。空海聞く。帝道 天を感ずるときは則ち祕錄必ず顯れ、皇風 地を動ずるときは則ち靈文聿に興る。（中略）窟觀の餘暇に時印度の文を學び、茶湯坐らに來たれば乍に震旦の書を閲る。蒼史が古篆、右軍が今隷、務光が韭葉、杜氏が草勢を見る毎に、未だ嘗て野心 憂いを忘れ、山情 笑を含まずんばあらず。（中略）古今文字の讚、右軍が蘭亭の碑、及び梵字悉曇等の書都て一十巻を繕修して、敢て進み奉る。（中略）伏して願はくば、陛下一たび梵字を披きたまはば、梵天の護り森羅にして[2]、再び神書を閲たまはば、神人の衛り逼側たらむことを。達水の遙浦 忽に封疆に入り、嵩山の夐岫 來たって正朔を受けむ。常住の字、不壞の體を加持し、遂古の民、今辰に擊耕せむ。（中略）沙門空海、誠に惶れ誠に恐る。謹んで言す。

梵字悉曇字母幷釋義一巻　古今文字讚三巻
古今篆隷文體一巻　梁武帝草書評一巻

王右軍蘭亭碑一卷　　曇一律師碑銘一卷 草書
大廣智三藏影讃一卷
弘仁五年閏七月八日、沙門空海 進（たてまつ）る。　（『定本弘全集』8:62-64）。

右の上表文から、『悉曇字母釋義』は大師が弘仁五年（813）に嵯峨天皇に獻上したことが知られる。

1．2　五大院安然師の著作に見る『悉曇字母釋義』

五大院安然師は『諸阿闍梨眞言密教部類總錄』において、「悉曇字母幷義釋一卷海和上撰」と記している（大正 55:1131a10）。また、同じく安然師の『悉曇藏』において、實際に『悉曇字母釋義』を引用している。それらは左の如くである。

①『釋義』一萬三千八百七十二字（『悉曇藏・序』大正 84: 365b25）。

②空海『悉曇字母釋義』云、悉曇者印度之文書也。『西域記』云、梵天所製。五天竺國、皆用此字。然因地隨人、稍有增減。語其骨體、以此爲本。劫初之時、世無法教。梵王下來、授以此悉曇章。根源四十七言流派餘一萬。世人不解元由、謂梵王所作。若依『大毘盧遮那經』云、此是文字者、自然道理之所作也。非如來所作、亦非梵王諸天之所作。若雖有能作者、如來不隨喜。諸佛如來以佛眼觀察此法然之文字、卽如實而說之、利益衆生。梵王等傳受轉教衆生、世人但知彼字相、雖日用而未曾解其字義。如來說彼實義。若隨字相而用之、則世閒之文字也。若解實義、則出世閒陀羅尼之文字也」（『悉曇藏・卷第一』大正 84:369c22-370a6）。

③又空海云、自然道理所作。大日佛眼觀而說之。梵王傳教衆生（『悉曇藏・卷第一』大正 84:370b6-7）。

④或作空海本 𑖀𑖼（『悉曇藏・卷第三』大正 84:389a27）。

⑤空海『釋義』云、𑖀悉𑖼曇𑖽囉𑖼窣覩。此云成就吉祥章也（『悉曇藏・卷第四』大正 84:395c19-20）。

⑥空海『悉曇釋義』云、𑖀阿上聲呼。𑖀阿去聲長呼。𑖀伊上聲。𑖀伊去聲長引。𑖀塢上聲。𑖀汚長聲。𑖀哩彈舌呼。𑖀哩彈舌

去聲引呼。ra 呂彈舌上呼。la 盧[3]彈舌長呼。va 噎。sa 愛。ha 汚長聲。ha 奥去長引。kṣa 闇也。ṣṭa 惡也。ka 迦上聲呼。ga 佉上呼。ṭa 誐上呼。ma 伽去引。ta 仰鼻聲呼。da 遮上聲。ka[4] 磋上。ṭa 惹也。ṭa 鄭去聲。ṭa 孃上聲。ta 吒上呼。na 咤上。da 拏上 ṭa 荼去。na[5] 拏陀爽反仍鼻聲呼。da 多上。ta 他上。na 娜也。da 馱也。da 曩也。pa 跛也。ba 頗。da 摩也。ṭa 婆重上呼。sa 莽也心義又名大空。ya 野也。ra 囉也。la 邏也上。va 嚩也。śa 捨也。sa 灑也。sa 娑[6]上也。ha 賀也。kṣa 乞灑文。（『悉曇蔵・巻第五』大正84:407c8-21）。

昨年、大澤聖寛師によって『悉曇字母釋義』の僞作説が呈された（大澤2016）。師は六説を立てて、現行の『悉曇字母釋義』と『性靈集』巻第四「梵字幷びに雜文を獻ずる表」に載せる『悉曇字母釋義』は別本と見作す。しかし右に見る如く、安然師の著作に現行の『悉曇字母釋義』の引用が確認されるのであり、現行の『悉曇字母釋義』を非御作とするのは極めて困難である[7]。

1．3　運敞師の『悉曇釋』引用説

先に見る如く「梵字幷びに雜文を獻ずる表」に載せる七部の獻上書の合計卷數は九卷であり、文中に記す「都（すべ）て一十卷」に比して一卷少ないことになる。この中で、『古今文字讚』は筆者が先年發見した。國立國語研究所本に見るように、『古今文字讚』は確かに上中下の三卷である（大柴2014）。『古今篆隸文體』は京都毘沙門堂所藏本が唯一の傳本である（大柴2015）。『梁武帝草書評』は梁武帝撰『草書狀』のことであり、京博に明・沈粲の模寫本が傳存する。「王右軍（王羲之）蘭亭碑」と共に、その文量の少なさから一卷であったことが推測される（大柴2016）。また、「曇一律師碑銘一卷」と「大廣智三藏影讚一卷」に關して、これらの碑文の拓本は慧運師『慧運律師書目錄』には「不空三藏碑一卷。無畏三藏碑一卷。興禪寺三藏碑一卷。金剛三藏碑一卷。大明和尚碑一卷。慧果和尚碑一卷。師資相授法傳一卷。蘇州報恩寺政興大師碑銘一帖」を載せ（大正55:1091c1-8）、皆一卷と成っている。從って、「梵字幷びに雜文を獻ずる表」の「曇一律師碑銘一卷」と「大廣智三藏影讚一卷」も一卷であったと考えるのが自然であろう。

故に、もし「梵字幷びに雜文を獻ずる表」本文の「都（すべ）て一十卷」に誤記がないとすれば、その缺損する一卷は「梵字悉曇字母

并釋義一卷」以外には求め難いことになろう。「梵字悉曇字母并釋義一卷」は「并」の一字があり、「一卷」は「二卷」の誤寫である可能性が指摘される。

實際、「梵字悉曇字母并釋義一卷」の「一卷」は先師によって問題視されている。運敞師（1614-1693）は『遍照發揮性靈集便蒙』卷第四において、前掲「梵字并びに雜文を獻ずる表」の「梵字悉曇字母并釋義一卷」に注して次の如く推測する。

『請來錄』に『梵字悉曇章』一卷と『悉曇釋』一卷を載す。「一」の字の上に恐らくは一つの「各」の字を脱するならん。

（『眞全』42:126）

つまり、運敞師は『梵字悉曇字母并釋義』とは『御請來目錄』に載せる『梵字悉曇章』と『悉曇釋』のことであり、「一卷」の前に「各」字が拔け落ちていると見作す。すなわち、元來は「『梵字悉曇字母并釋義』各一卷」であって、要するに『梵字悉曇字母并釋義』は二卷であったと運敞師は推測する。

これに對して、「各一卷」という表現は一般的ではないと思われるが、「并」とあることから『梵字悉曇字母并釋義』が一卷ではなく二卷であったという見解に關しては、異論はない。但し、筆者は上述の如く「『梵字悉曇字母并釋義』二卷」であったと考える。「二」は「一」に誤寫されたのではないかと推察する。今後、この點の異同の有無について『性靈集』の寫本群を確認してゆくことが課題となろう。

また、『梵字悉曇章』一卷が用いられているとする運敞師の見解は、部分引用と解するのがよいであろう。『悉曇字母釋義』の中に「悉曇章」の表現があり、また『悉曇字母釋義』に記す五十の字母ならびに𑖀字の十二轉は、まさに『大悉曇章』の冒頭からの拔粹である（『定本弘全』5:281-282）。因みに阿字門から乞灑字門までの不可得義は、不空三藏譯『瑜伽金剛頂經釋字母品一卷』（『御請來目錄』所錄）からの引用であり、「法」を「諸法」に改變するなどの表現に若干の變化が與えられていると考えられる。

いずれであれ、「代彼口實」で終わらない『御作』の出現によって、運敞説の信憑性が高まるのであり、その再檢討が必要となる。

2　『御作』について

2．1　院政期の本奥書

以下、實際に『御作』の内容に概觀したい。高野山大學圖書館所藏の『御作』の奥書に據って、高大本『御作』は嘉應元年（1169）に書寫され、天保二年（1831）と天保四年（1833）に轉寫された第三轉寫本であることが知られる（翻刻本を參照されたい）。從って、『御作』は遅くとも院政期の頃には存在していたと考えられる。

上掲【圖1】に見る如く、『御作』は現在通用されている『悉曇字母釋義』の「代彼口實」では終わらず、續いて「大般若經第四百一十五云」以下へと續く。

2．2　『御作』「代彼口實」以降の内容構成

その「大般若經第四百一十五云」以下の内容は以下の如くである

【引用①】玄奘譯『大般若經・卷第四百一十五』第二分念住等品第十七之二（大正 7:81c11-82a24）。
【引用②】羅什譯『大品般若經・卷第五』廣乘品第十九（大正 8:256a6-256b28）。
【引用③】羅什譯『大智度論・卷第四十八』釋四念處品第十九（大正 25:408b1-409c16）[8]。
【引用④】羅什譯『大品般若經・卷第二十四』四攝品第七十八（大正 8:396b21-396c1）。
【引用⑤】羅什譯『大智度論・卷第八十九』論釋四攝品第七十八之餘（大正 25:686c1-86c8）。
【引用⑥】善無畏・一行譯『大日經・卷第六』百字成就持誦品第二十二（大正 18:41b13-41c27）。
【引用⑦】一行記『大日經疏・卷第十九』百字成就持誦品第二十二（大正 39:774a9）。
【引用⑧】一行記『大日經疏・卷第十九』百字成就持誦品第二十二（大正 39:774c19-775a5）。
【評曰❶】評曰、據『金剛頂』、此等文字、卽是法曼荼羅相好圓滿之法身也。一法身中隨出多法身、皆以非字爲種子也。別有三十二相布字法、是大祕密、不載。

【引用⑨】善無畏・一行譯『大日經・卷第五』字輪品第十（大正 18:30b7-30c23）。
【引用⑩】一行記『大日經疏・卷第十四』字輪品第十（大正 39:722c14-725b13）。
【引用⑪】慧苑撰『續華嚴略疏刊定記』（卍續藏 3:882a3-6）。
【引用⑫】不空譯『華嚴經入法界品頓證毘盧遮那法身字輪瑜伽儀軌』（大正 19:709b5-709b29）。
【評曰❷】評曰、『大日經』中、有五字輪・二百五十觀法、及百字輪布字觀法、并以三十二字爲三十二相布字觀法。『華嚴儀軌』四十二門布字觀法、并有圖壇、不載此中。又昔、日照三藏將來華嚴三昧四十二重華壇佛像觀行圖壇、及以天臺大師法華三昧四十二位華臺成佛圓融觀行、特與此文甚以契合。又『大日經』五字大漫荼羅、及金剛頂五字旋陀羅尼、竝是祕密修證之法門也。已上。
【作者曰】凡一切梵語、皆有字緣字界之義。唯釋此義、異說不同也。且出一說。
【引用⑬】世親造・玄奘譯『倶舍論・卷第九』分別世品第三之二（大正 29:50b14-16）。
【引用⑭】普光撰『倶舍論記・卷第九』分別世品第三之二（大正 41:169c19-170a6）。

この後半部分には二カ所に「評曰」が現れ、作者の解釋が記されている。これら二つの解釋は同一の作者によるものと思われ、従って少なくとも【引用⑧】から【引用⑫】までは一書であり、延いては『御作』の「代彼口實」以降の全てが一書であったことを憶測せしめるのである。

その第二の「評」には、「又昔、日照三藏將來華嚴三昧四十二重華壇佛像觀行圖壇」とある。この「日照三藏」とは地婆訶羅（Divākara）のことであり、儀鳳元年（676）にインドから大唐へ來て、太玄寺にて『華嚴經入法界品』などを譯しているから、文中の「將來」とは日照三藏（地婆訶羅）が四十二重觀行圖壇をインドから大唐へ將來したという意味であり、日本へ請來したと解することはできない。この「評」の作者が唐人であると考えられるのであり、すなわち「評」の書き込みは大師ではなく、また安然師でもないということである。

また、不空三藏の『華嚴經入法界品頓證毘盧遮那法身字輪瑜伽儀軌』の引用が存在することから、假に某一書であった場合、

その成書年代は不空三藏以降となる。

これらの引用書は全て大師以前の成書である。従って、これらが某一書にまとめられていたとして、その某一書を大師が請來したとしても時代的に矛盾は來さない。

2．3 『悉曇字母釋義』の經證と『御作』「代彼口實」以降の引用書との一致について

『悉曇字母釋義』は序文の末尾において、本書の經證を擧げる。

具如『華嚴』・『般若』・『大毘盧遮那』・『金剛頂』・及『涅槃』等經廣說。（『定本弘全』5:106）

現行の『悉曇字母釋義』は、その序文に「如『涅槃經』云世間所有一切教法皆是如來之遺教」が見られる。續く「然則、內外法教、悉從如來而流出」以降は大師の文章と考えられるから、『涅槃經』の部分は上の一文のみである。しかし曇無讖・慧嚴の兩譯において該當する文脈は見出だせず、從って上文は引用文ではなく、大師が總括した表現と考えられる。

また、上述の如く字母の部分は大師請來の不空三藏譯『瑜伽金剛頂經釋字母品』に依據して作られており、その後に「故大般若經五十三云」として、「當知是爲菩薩摩訶薩大乘相」までを『大般若經』から引用する（大正7:82a26-82b19）。この中で、「二十種殊勝功德」の通し番號は『大般若經』には記されておらず、大師が便宜上書き加えたと考えられる。また『大般若經』の當該引用箇所において、「善現、是爲得二十種殊勝功德」までは『瑜伽金剛頂經釋字母品』も引用しており、おそらく大師は『瑜伽金剛頂經釋字母品』の引用文からその元本である『大般若經』に當たったものと思われる。

從って、現行の「代彼口實」で終わる『悉曇字母釋義』において認められる經證は『涅槃』・『金剛頂』・『般若』となる。つまり現行テキストにおいては『華嚴』と『大毘盧遮那』の經證が見出だせない。しかし、『御作』の「代彼口實」以降には、上に見る如く、『華嚴』關係は【引用⑪⑫】に、『大毘盧遮那』關係は【引用⑥⑦⑧⑨⑩】に確認されるのである。また、經證に云う「『般若』」とは、實際は『御作』の【引用①②③④⑤】のことと考えられる。また「金剛頂五字旋陀羅尼」は、『金剛頂經毘盧遮那三摩地

法』に説かれる所である。また、『倶舎論』・『倶舎論記』は「『涅槃』等」の「等」に相當するだろう。これら引用書の存在は、『悉曇字母釋義』が元來は『御作』の後半部分をも含めた體裁であったことの間接的な證左となろう。

3　『御作』「代彼口實」以降と安然師『悉曇藏』

3．1　兩書に共通する引用書

先に現行の『悉曇字母釋義』において、安然師『悉曇藏』に引用されている箇所が存在していることを指摘した。しかし『悉曇藏』には、當該寫本『御作』の「代彼口實」以降と全く同じ引用箇所が多く含まれている。兩書を對比すれば左の如くなる。

【引用①】『御作』一頁八行ー三頁七行：『悉曇藏』に該當箇所なし。
【引用②】『御作』三頁八行ー十一頁三行：『悉曇藏・卷第六』第六字義入門一釋義門（大正 84:425c29-426b19）。
：『悉曇藏・卷第七』第七字義解釋二釋成句（大正 84:446b17-447a9）。
【引用③】『御作』十一頁三行ー二十九頁七行：『悉曇藏・卷第七』第七字義解釋二釋成句（大正 84: 447a9-448b19）。
【引用④】『御作』二十九頁八行ー三十一頁一行：『悉曇藏』に該當箇所なし。
【引用⑤】『御作』三十一頁二行ー三十二頁一行：『悉曇藏』に該當箇所なし。
【引用⑥】『御作』三十二頁一行ー三十七頁八行：『悉曇藏・卷第六』第六字義入門二現字形（大正 84:426b22-427a1）。
【引用⑦】『御作』三十七頁八行ー四十三頁三行：『悉曇藏・卷第六』同右（大正 84:427a1-427b8）。
【引用⑧】『御作』四十三頁四行ー四十五頁七行：『悉曇藏・卷第六』同右（大正 84:427c15-428a3）。
【評曰❶】『御作』四十五頁七行ー四十六頁三行：『悉曇藏・卷第六』同右（大正 84:428a3-7）。
【引用⑨】『御作』四十六頁三行ー五十二頁五行：『悉曇藏・卷第六』第六字義入門三觀字輪（大正 84:428a8-428b16）。
【引用⑩】『御作』五十二頁四行ー七十九頁四行：『悉曇藏・卷第六』同右（大正 84:428b16-431a28）。

【引用⑪】『御作』七十九頁四行～八十頁一行：『悉曇藏・巻第六』同右（大正84:431a28-431b4）。
【引用⑫】『御作』八十頁一行～八十三頁四行：『悉曇藏・巻第六』同右（大正84:431b4-431b29）。
【評曰❷】『御作』八十三頁四行～八十四頁六行：『悉曇藏・巻第六』同右（大正84:431b29-431c9）。
【作者曰】『御作』八十四頁六行～八十四頁七行：『悉曇藏』に該當箇所なし。
【引用⑬】『御作』八十四頁八行～八十五頁三行：『悉曇藏』に該當箇所なし。
【引用⑭】『御作』八十五頁三行～八十七頁五行：『悉曇藏』に該當箇所なし。

ただし、【引用⑩】において『御作』の『大日經疏』は、『悉曇藏』の「菩薩行舞者」(429a26) から「謂彼」(429b27) までの箇所と、「有惠之人」(430a6) から「如是一輪輪」(430a17) までの部分を載せない。おそらく割愛されたか、脱したと思われる。【引用⑥】から【評曰❷】の部分は、基本的に『悉曇藏・巻第六』第六字義入門の「二現字形」・「三觀字輪」においてまとまって引用されているのである。

例えば、【引用⑧】『大日經疏』の引用において、『大日經疏』自身は「如是功德力用等也」の後には「此中有一偈、從祕密主眞言門菩薩」と續くが（大正39:775a4-7）、『御作』と『悉曇藏』は等しく「如是功德力用等也」に續いて「評曰、據金剛頂、云々」とする（第四十五頁、大正84:428a3-4）。從って、『悉曇藏』の當該箇所は、部分的には『大日經疏』に立ち戻って、內容を增補している所もあるが、基本的には引用書の原文を引用しているのではなく、引用書に「評曰」を加えた某書を又引きしていると考えられる（『悉曇藏』の全體構造の解明は今後の課題としたい）。

3．2　兩書におけるテキスト上の一致

『御作』・『悉曇藏』が某書から又引きしていることは、兩書のテキスト上の一致からも窺い知ることができる。『御作』・『悉曇藏』・大正藏の三者を校合するに、自ずと①大正藏と『御作』が一致し、『悉曇藏』が異なるもの、②大正藏と『悉曇藏』が一致し、『御作』が異なるもの、③『御作』と『悉曇藏』が一致し、大正藏が異なるもの、の三種に分類される。③は凡そ四十箇所に見られ

る。その中で、異同が顕著なものを選んで示せば以下の如くである。

【第三十八頁】置謂種種莊嚴也：㊙。置位謂種種莊嚴也：㊟。
【第四十三頁】阿字乃至訶字等於一切法自在：㊙。仰壤拏曩莽等於一切法自在：㊟。
【第五十二頁】輪字輪品第十：㊙。祕密漫荼羅品第十一：㊟。
【第五十六頁】其三部者謂三字是也：㊙。其三部者謂阿沙嚩三字是也：㊟。
【第七十一頁】亦從中而置惡字：㊙。亦從中而置迦入字：㊟。

以上から、『御作』と『悉曇藏』に載せる引用書は同一もしくは同一系統の寫本を見ていることがほぼ断定される。つまり、『御作』と『悉曇藏』に引かれる引用文は、引用書そのものから直接に引用されたのではなく、某書に載せる引用文を又引きしたものと言える。従って、『御作』の「代彼口實」以降は大師によって構成されたものではなく、某書によって既に構成されたものであると考えられる。

小結

今、改めて書名の「梵字悉曇字母幷釋義」の意味を鑑みるに、「梵字悉曇の字母、幷びに釋義」と訓ずることができる。その意味するところは、「梵字悉曇の字母と、その（梵字悉曇の）釋義」ということであり、このタイトルは「梵字悉曇字母」と「梵字悉曇釋義」という二つのタイトルを合一したものと考えられる。

このように理解するならば、後者の「梵字悉曇釋義」には、實に「悉曇釋」の語を見出だすのである。現行の「代彼口實」で終わる『悉曇字母釋義』において「釋義」に相當するのは、𑖀に始まる五十の字母の下に記される「不可得義」の部分のみである。從來はこのことに關して、何の違和感もなかった。しかし、高大本『御作』の出現によって改めてその内容を鑑みるに、梵

字悉曇の字義の詳しい解釋（釋義）は、「代彼口實」に續く部分に入って本格的に說かれていることが知られる。またそれらの引用文と比較するに、現行『悉曇字母釋義』における各字母の「不可得義」は單にそれを列擧しているに過ぎないことがわかる。

以上を總ずるに、『御作』の「代彼口實」以降は某書を引用している蓋然性が高く、その編著者は不空三藏の弟子であったと思われる。そしてその某書とは運敞師が推測する如く、『悉曇釋』そのものではないかと思われる。因みに安然師の『諸阿闍梨總錄』には、「悉曇釋一卷海」と記されており（T55:1131a5）、安然師は『悉曇釋』の存在を知っている。しかし、安然師は『悉曇藏』序文などにおいて、『悉曇藏』に用いた引用文獻を列擧しているが、その中に上述の如く大師の『悉曇字母釋義』は見出だされるものの、『悉曇釋』の名は現れないことから、おそらく安然師は『悉曇釋』を入手していないと思われる。要するに、『悉曇藏』に見られる引用文は『悉曇字母釋義』を參照していると思われ、某書（『悉曇釋』）→『悉曇字母釋義』→『悉曇藏』の流れが想定される。

また先行研究では、序文に「聊爲童蒙、鈔錄斯記」とあることから、『悉曇字母釋義』は天皇へ獻上したとは考え難いとする見解がある。筆者は「好學同志、代彼口實」とあることから、『悉曇字母釋義』は元來、嵯峨天皇のために著されたものではないと考える。しかし、下の翻刻本に見るように、『御作』の「代彼口實」以降は悉曇の詳しい釋義のために相當の文量が使われており、嵯峨天皇への獻上書として相應しく思われる。あるいは現行テキストの部分は、大師が實際に「童蒙」の爲に既に撰していたものであり、弘仁五年に嵯峨天皇の敕命に應じて『悉曇釋』を加えて二卷と成し、獻上したのかもしれない。もしそうであったならば、請來本の『悉曇釋』を獻上することが主たる目的であったと考えられる。『悉曇釋』が獻上されたのなら、「梵字幷びに雜文を獻ずる表」に列擧される書物は大師御作の「梵字悉曇字母」を除いて全て請來本となるのであり、請來本を獻上するということと辻褄が合うことになろう。つまり、大師御作の「梵字悉曇字母」の方がむしろ實質的には添付書として捉えられるのである。

【推測される『梵字悉曇字母幷釋義』（二卷）の構成】

「梵字悉曇字母」（一巻）＝弘法大師撰（沙門空海撰）
「梵字悉曇釋義」（一巻）＝不空三藏某弟子の編著『悉曇釋』
『梵字悉曇字母幷釋義』（二巻）

『梵字悉曇字母幷釋義 御作』の翻刻本

『梵字悉曇字母幷釋義』の寫本

仁和寺治暦本：治暦四年（1068）書寫
高野山三寶院本：元永二年（1119）頃書寫
仁和寺久安本：久安二年（1146）書寫
石山寺本：久壽二年（1155）書寫

凡例

一、頁數の割り振りは、〈圖1〉の右頁を第一頁、左頁を第二頁とし、以下これに准ずる。
一、漢字は基本的に舊字を用いた。
一、略號は以下の通り。
　㊥：大正新修大藏經
　㊙：『梵字悉曇字母幷釋義　御作』
　㊫：『悉曇藏』

翻刻本

＊前略

【第一頁】

無所得而爲方便所得文字陀羅尼
門當知是爲菩薩摩訶薩大乘相
若有人欲得不妄語常修實語
學如來眞實 10 語速證大覺常住
之身應當學此實語字門如來慇
懃說嘆此字門是故聊爲童蒙
彼イ
鈔錄斯記好學同志代致口實
大般若經第四百一十五云菩薩修行

【第二頁】

般若無所得而爲方便入衰字
門悟一切法本故二洛字三跛字四
者字五娜字六字砢七拕字八婆
字九荼字悟一切法離熱 11 矯 12 穢得淸
淨故十娑字十一縛字十二頞字十三也字十四
瑟吒字五迦字六 13 娑字七麼字八伽字九他字廿
闍字廿一濕縛字二達字三捨字四佉
字五羃字六薩頞字七若字八剌 14 他字九

【第三頁】

呵字九 15 薄字卅綽字一颯麼字二嗑縛字三
蹉字四鍵字五摭 16 字六拏 17 字七頗字八
塞迦字九逸娑字卌酌字 18 一吒字二
擇字一切法究竟處所不可得故
善現 19 此擇字門是能悟入法空邊際
除此諸字表諸法空更不可得第四百九
十卷亦有卌三字如前无闕
大品經云復次須菩提菩薩摩訶

【第四頁】

薩摩訶行所謂字等語等諸字入門阿字
門一切法初不生故羅字門一切法離垢
故波字門一切法第一義故遮字門
不終
一切法終不可得故諸法 不生故
那字門諸法離名性相不得不失
故邏字門諸法度世間故亦愛枝 20
因緣滅故陀字門諸法善心生故亦

【第五頁】

施相故婆字門諸法婆字離故
荼字門諸法荼字淨故娑 21 字門諸
法六 22 自在王性淸淨故和字門入諸法
語言道斷故多字門入諸法如相
不動故夜字門入諸法如實不生
故咤字門入諸法折 23 伏不可得故
迦字門入諸法作者不可得故婆 24
字門入諸法時不可得故諸法時來

【第六頁】

轉故 25 磨 26 字門入諸法我所不可得故
伽字門入諸法去者不可得故他字門
入諸法處不可得故闍字：門入諸法生
不可得故簸 27 字門入諸法簸 28 字不可得
故馱字門入諸法性不可得故賒字門
入諸法定不可得故呿 29 字門入諸法
虛空不可得故叉字門入諸法盡不

可得故哆字門入諸法有不可得故
【第七頁】
若字門入諸法智不可得故桅[30]字門
入諸法拕[31]字不可得故婆字門入
諸法破壞不可得故車字門入諸法
欲不可得故如影五陰亭不可得故
摩[32]字門入諸法摩[33]字不可得故火
字門入諸法喚不可得故嗟字門入諸
法嗟字不可得故伽字門入諸法後[34]不
可得故他[35]字門入諸法處不可得故
【第八頁】
拏字門入諸法不來不去不立不坐不
臥故頗字門入諸法遍不可得故
歌字門入諸法聚不可得故醝字門
入諸法醝字不可得故遮字門入諸法
行不可得故咤[36]字門入諸法傴[37]不
可得[38]荼字門入諸法邊竟處不可
得[39]故不終不生故[40]過荼無字可得[41]
何以故更無字故諸字無等[42]無名
【第九頁】
亦不[43]滅亦[44]不可說不可示不可見不可
書[45]須菩提、當知一切諸法如虛空須
菩提是名陀羅尼門所謂阿字義
若菩薩摩訶薩是諸字門印阿
字印若聞若受若誦若讀若持[46]
若爲他說如是知當得二十功德何
等二十得强識念得慚愧得堅固
心得經旨趣得智慧得樂說無礙
【第十頁】
易得諸[47]陀羅尼門得無疑悔心得
聞善不喜聞惡不怒得不高不下住
心得無增減[48]得善巧知衆生語得巧
分別五衆[49]十二入十八界十二因緣四
緣四諦得巧分別衆生諸根利鈍
得巧知他心得巧分別日月歲節得
巧分別天耳通得巧分別宿命通得
巧分別生死通得巧能[50]說是處非是[51]
【第十一頁】
處得巧知衆生來[52]坐起等身威儀
須菩提是陀羅尼門字門阿字門等
是名菩薩摩訶薩摩訶衍[53]論釋曰
字等語等者是陀羅尼於諸字平
等無有愛憎又此諸字因緣未會
時亦無終歸亦無現在亦無所有但住
吾我心中憶想分別覺觀心說是散
亂心說不見實事如風動水則無
【第十二頁】
所見等者與畢竟空涅槃同等菩薩
以此陀羅尼於一切諸法通達無礙是
名字等語等問曰若略說則五百陀
羅尼門若廣說則無量陀羅尼門
今何故[54]說是字等陀羅尼名爲諸
陀羅尼門答曰先說一大者則知餘
者皆說此是諸陀羅尼初門說初
餘亦說復次諸陀羅尼法皆從分
【第十三頁】
別字語生卌二字是一切字根本因(イン)[55]字
有語因語有名因名有義菩薩若[56]
聞字因字乃至能了其義是字
初阿後荼[57]中有四十得是字陀羅尼
菩薩若一切語中聞阿字卽時隨
義所謂一切法從初來不生相阿提
秦言初阿耨波陀秦言不生若聞

羅字卽隨義知一切法離苦[58]相
【第十四頁】
羅闍秦言垢若聞波字卽時知一切
法入第一義中波羅木陀秦言第一
義若聞遮字卽時知一切諸行皆
非行遮利[59]夜秦言行若聞那字
卽知一切法不得不失不來不去那
秦言不若聞邏字卽知一切法離
輕重相邏求秦言輕若聞陀字卽
知一切法善相陀摩秦言善若
【第十五頁】
聞婆字卽知一切法無縛無解婆陀
秦言縛若聞荼字卽知諸法不熱相
南天竺荼闍[60]他秦言不熱若聞沙字
卽知人身六種相沙秦言六若聞和
字卽知一切諸法離語言相和（干波反）
波他秦言語言若聞多字卽々[61]諸
法在（如）中不動多他秦言如若聞夜
字卽知諸法入實相中不生不滅
【第十六頁】
夜他跋秦言實若聞吒字卽知一切
法無障礙相吒婆秦言鄣[62]礙若
聞迦字卽知諸法中無有作者
迦邏[63]迦秦言作者若聞婆字卽知
一切種不可得娑[64]婆秦言一切若聞
魔[65]字卽知一切法離々[66]我所魔迦
羅秦言我所若聞伽字卽知一切法
底不可得伽陀秦言底若聞他[67]
【第十七頁】
字卽知四句如去不可得多他[68]阿伽
陀秦言如去若聞闍（社音）字卽知諸
法生老不可得闍提闍羅秦言
生老若聞濕波字卽知一切法不可
得如濕波字不可得濕波[69]字無義故
故[70]不釋若聞馱字卽知一切法中法
性不可得馱摩秦言法若聞賒字
卽知諸法寂滅相賒多（都餓反）
【第十八頁】
秦言寂滅若聞哿字卽知一切法
虛空不可得哿伽秦言虛空若聞叉
字卽知一切法盡不可得叉耶秦言盡
若聞哆字卽知[71]諸法邊不可得何[72]利
迦哆度求那秦言是事邊得何利
若聞若字卽知一切法中無智相若
那秦言智若聞他字卽知一切法義
不可得阿利[73]他秦言義若聞婆字
【第十九頁】
卽知一切法不可破相婆伽秦言破
若聞車字卽知一切法無所去伽車提
秦言去若聞濕焱[74]字卽知諸法牢
堅如金剛石阿濕焱[75]秦言石若聞火
字卽知一切法無音聲相火夜秦言
喚來若聞蹉字卽知一切法無慳無
抱[76]相未[77]蹉羅秦言慳若聞伽字卽
知諸法不厚不薄伽那秦言厚若
【第二十頁】
聞他（土荼反）[78]字卽知諸法無住處南天竺
他那秦言處若聞拏字卽知一切法
及衆生不來不去不坐不臥不立不起
衆生空法空故南天竺拏秦言不若
聞頗字卽知一切法因果空故頗羅秦
言果若聞歌字卽知一切法五衆不可得
歌大秦言衆若聞醝字卽知

醝字空諸法亦爾若聞遮字卽

【第二十一頁】

知一切法不動相遮羅地秦言動若

聞多[79]字卽知一切法此彼岸不可得多[80]

羅秦[81]言岸若聞茶字卽知一切法必

不可得波茶秦言必茶外更無字若更

有者是四十二字枝派是字常在世間

相似相續故入一切語故無礙如國々不

同無一定名故言無名聞已便盡故言

滅諸法入法性皆不可得而況字可說

【第二十二頁】

諸法無憶想分別故不可示先意業

分別故有口業口業因緣故身業作

字々是色法或眼見或耳聞衆生强

作名字無因緣以是故不可見不可

書諸法常空如虛空相何況字說

已便滅是文字陀羅尼是諸陀羅尼

門問曰知是陀羅尼門因緣者應

得無量無邊功德何以故[82]但說廿[83]答

【第二十三頁】

曰佛亦能說諸餘無量無邊功德

但以廢說般若波羅蜜故但略說廿

得强識念者菩薩得是陀羅尼

常觀諸字相修習憶念故得强識

念得慚愧者集諸善法厭諸惡

法故生大慚愧心得堅固者集諸

福德智慧[84]堅固如金剛乃至阿

鼻地獄事尙不退阿耨多羅三藐

【第二十四頁】

三菩提何況餘苦得經旨趣者知

佛五種方便說法故名爲得經旨

趣一者知作種々門說法二者知爲何

事故說三者知以方便故說四者知示

理趣故說五者知以大悲心故說得

智慧者菩薩因是陀羅尼分別

破散諸字[85]言語亦空言語空故名

亦空名空故義亦空得畢竟空

【第二十五頁】

卽是般若波羅蜜智慧樂說者

既得如是畢竟淸淨無礙智慧

以本願大悲心度衆生故樂說易得

陀羅尼者譬如折[86]竹初節既破

餘者皆易菩薩亦如是得是文

字陀羅尼諸陀羅尼自然而得

無疑悔心者入諸法實相中雖未

得一切智慧於一切深法中無疑無

【第二十六頁】

悔聞善不喜聞惡不瞋者各々分

別諸字無讚嘆[87]無毀呰故聞善

不喜聞惡不瞋不高不下者憎愛

斷故善巧知衆生語者得解一切衆

生言語三昧故巧分別五衆十二入十八

界十二因緣四緣四諦者五衆等義

如先說巧分別衆生諸根利鈍知他

心天耳宿命巧說是處非處者

【第二十七頁】

如十力中說巧知往來坐起等者如阿[88]毘

跋致品中所說日月歲節者日名從旦至

旦初分中分後分夜亦三分一日一夜有卅時

春秋分時十五時屬晝十五時屬夜

餘時增減五月至晝十八時夜十二時

十一月至夜十八時晝十二時一月或三

十日或三十日[89]半或廿九日或廿七日半有四種

月一者日月二者世間月三者月々四者

【第二十八頁】

星宿月日月者卅日半世間月者卅日

月月者二十九日加六十二分之卅星宿月

者廿七日加六十七分之廿一閏[90]月者從

日月世間月二事中出是名十三月或

十二月或十三月名一歳是歳三百六

十六日周而復始菩薩知日中分時

前分已過後分未生中分中無住處

無相可取日分空無所有到卅日時

【第二十九頁】

廿九日已滅云何和合成月々無故云

何和合而爲歳以是故佛言世間法

如夢如幻[91]但是誑心法菩薩能知

世間日月歳和合能知破散無所

有是名巧分別如是等種々分別

是名菩薩摩訶薩摩訶衍

[92]　釋第十八品竟[93]

又云菩薩當善學分別[94]諸字亦

【第三十頁】

當善知一字乃至卌二字一切語言

皆入初字門一切語言亦入第二[95]字門[96]

乃至第卌二字門一切語言皆入其中一

字皆入卌二字[97]亦入一字是衆生應如

是善學卌二字善學卌二字已能善

說字法善說字法已善說無字法

須菩提如佛善知字法善知[98]字善知

無字爲無字法故說字法何以故

【第三十一頁】

須菩提過一切名字法故名爲佛法

論釋四[99100]一字盡入諸字者譬如

兩一合故爲二三一故爲三四一爲四如是乃

至千萬又如阿字爲定阿變爲羅亦

變爲波如是盡入卌二字卌二字入一字

者卌二字盡有阿分阿分還入阿中善

知字故善知諸法名善知諸法名

故善知諸法義無字卽是諸法實

【第三十二頁】

相義已上[101]大日經百字持誦品云

爾時世尊又復宣說淨除無盡

衆生界句流出三昧句不思議句轉

他門句若本無所有隨順世間

生云何了知空生此瑜伽者若自性如是

覺名不可得當等空心生所謂

菩提心應發起慈悲隨順[102]世間

住於唯相[103]行是卽名諸佛當知

【第三十三頁】

想造立觀此爲空々如下數法轉

增一而分異勤勇空亦然增長

隨次第卽此阿字等自然智加

持阿[104]嚩迦佉哦伽遮車若社吒々[105]拏

荼多他娜馱波頗摩[106]婆野囉羅[107]

嚩奢沙娑訶仰壤拏曩莽

祕密主觀此空中流散假立阿字

之所加持成就三昧々[108]道祕密主

【第三十四頁】

如是阿字住於種種莊嚴布列圖位

以一切法本不生故顯[109]示自形或以不

可得義現嚩字形或諸法遠離

造作故現迦字形或一切法等虚

空故現佉字形或行不可得故現

哦[110]字形或諸法一合相不可得故

現伽字形或一切法離生滅故現[111]

遮[112]字形或一切法無影像故現車[113]形

【第三十五頁】

或一切法生不可得故現若字形

或一切法離戰敵故現社[114]字形或一

切法離我慢故現吒字形或一切

法離養育故現吒[115]字形或一切

法離怨對故現拏字形或一切法

離災變故現荼字形或一切法離

如々故現多字形或一切法離住處故

現他字形或一切法離施故現那

【第三十六頁】

字形或一切法界不可得故現馱字

形或一切法勝義諦不可得故現

波字形或諸法不堅如聚沫故現

頗字形或一切法離繫縛故現麼字

形或一切法諸觀不可得故現婆字

形或一切法[116]諸乘不可得故現也字

形或一切法離一切塵故現囉字形

或一切法無相故現邏字形或一

【第三十七頁】

切法離寂故現奢字形或一切法

本性鈍故現沙字形或一切法諦

不可得故現娑字形或一切法離

因故現訶字形祕密主隨入此等

一々三昧門祕密主觀是乃至卅二

大人相等皆從此中出仰壤嘩[117]曩

莽等於一切法自在而轉此等隨

現成就三藐三佛陀隨形好又[118]

【第三十八頁】

云次云祕密主觀此空中流散假

立阿字是假立[119]阿字之所加持成

就三昧道祕密主如是阿字種々閒

布圖位乃至有形無形有相無相一切

從阿字也置[120]謂種種莊嚴也觀者謂

令祕密主觀此也謂位[121]種種形像莊

嚴而分別其位也此諸法本不生故顯

示自形々々卽是阿字也於自形中顯

【第三十九頁】

示本不生也阿字如是祕密主種々置

位閒布我觀位[122]不生諸法自形顯示

是經文也觀此阿字於空中流出世

閒萬像一切世閒皆從此生然本不生

也阿字假立加持三昧成就證三昧具

般若成萬行皆由此阿字得福慧

圓滿皆從此阿字門也此字能生

種々色謂青黃赤白黑乃至雜閒有無

【第四十頁】

量種及種々形謂三角方圓半月之

類及本尊等無量不同若識此中

眞實之義無不擧體入於阿字之

門同於毘盧遮那也上來門[123]說阿

字門卽是顯示自身我卽我自身

本不生亦無滅不生不滅者卽是如

來之身當如是觀察也故云何[124]字以

自形顯示其德也次或無所得義[125]

【第四十一頁】

從囉字形顯示不可得義此囉

以證本不生也囉字形現此縛[126]卽是

下文言語道斷之[127]也此明何義佛告[128]

阿字具有一切功德或直從阿字門

以本不生而顯說之或從異門顯之卽
是囃等諸字門也其義雖異門亦
有殊然所示我之自身本不生義無
[129]異也若法有一是生卽是可說之相非
【第四十二頁】
[130]語道斷之法以囃字言語斷心[131]滅故
入阿字門以阿字故卽知此囃不可說
示也以下皆是異門之相或一切法中造
作離故迦[132]字形現此卽明一阿字門
然欲明一切法本來々[133]無作故現此
迦字然此迦字卽明何[134]字義也如迦
字若上不置橫畫卽不成迦字聲所以
不成者以迦中闕阿聲也此迦字
【第四十三頁】
上頭卽有阿形當知此百字皆爾下例
可解若無阿聲在中卽不開口亦
自無有聲也[135]
祕密主隨入此等一々三昧門祕密
主觀是乃至卅二丈[136]大人相等皆從
此中生阿字乃至訶字[137]等於一切法
自在而轉此等隨現三藐三佛陀
隨形好成就及此等三藐三佛陀隨
【第四十四頁】
入[138]形好祕密主一々三昧門隨入見[139]祕
密主乃至卅二大人相等皆此中生經
文也卽此一一字有卅二三昧門此卅二
門互相入故能成卅二相也謂上迦等
廿字也羅[140]等八字及此四字幷爲卅
二也一々字中三昧皆具卅二相也次
俄惹拏那麼故[141]字一切法中自在而轉
此等正等覺成隨形好成就隨現經文也
【第四十五頁】
此五字遍於定慧中亦能成三昧亦
能成智慧能遍成如來八十隨形好也
是故修眞言行者當識此等字義
若眞言中有此等字者隨義相
應卽知意明如此事也以明如此
義知[142]故卽知此眞言有如是功
德力用等也評曰據金剛頂此等文
字卽是法曼荼羅相好圓滿之
【第四十六頁】
法身也一法身中隨出多法身皆以非字
爲種子也別有三十二相布字祕密[法]
是大祕密不載三觀字輪[143]大毘盧
遮那成佛神變加持經卷第五
字輪品第十云
爾時薄伽梵毘盧遮那告持金剛
祕密主言諦聽祕密主有遍一切處
法門祕密主若菩薩住此字門一切
【第四十七頁】
事業皆悉成就
南麼三曼多勃馱喃阿
南麼三曼多勃馱喃娑
南麼三曼多伐折囉[144]赦囃
迦佉哦伽遮車若社吒咤拏荼
多他娜馱波頗麼婆野囉邏
囃奢沙娑訶吃灑[二合右此一轉皆上聲短呼][145]
南麼三曼多勃馱喃阿
【第四十八頁】
南麼三曼多勃馱[146]娑
南麼三曼多囃[147]折[148]囉赦囃
迦佉哦[149]誐伽遮車惹社吒咤拏荼哆[150]
他娜馱波頗麼婆野囉邏囃奢

沙娑訶乞[151] 灑二合右此一轉皆去聲 長呼之
南麼三曼多勃馱喃暗
南麼三曼多勃馱喃糝
南麼三曼多伐折囉赦鑁
【第四十九頁】
劍缺儼儉占襜染瞻齟[152] 嗢喃湛
擔探喃[153] 淡唼吒囉嚩閻嚂藍
鑁[154] 睒衫參甜[155156] 二合其口邊字皆帶第一轉本音呼之
南麼三曼多沒[157] 馱喃唵
南麼三曼多沒[158] 馱喃索
南麼三曼多嚩[159] 囉赦嘆[160]
屬[161] 却虐嚧[162] 灼綽弱杓磔[163] 坼搦擇[164]
咀[165] 託諾鐸博泊漠簿藥嚩落嘆
【第五十頁】　一
鑠嗦[166] 矐[167] 吃索二合皆帶第二[168] 伊縊[169] 塢烏
哩嘮[170] 里狸翳藹汗[171] 奥仰攘[172] 嚓曩
莽唄穰儜囊忙嗡髯喃南鑁
噓弱[173] 諾莫
祕密主如是字門道善巧法門次第
住眞言道一切如來神力之所加持善
[174] 解正遍知道菩薩行舞過去[175] 來
現在諸佛世尊已說當說今說々[176] 祕密主
【第五十一頁】
我今普觀諸佛說刹土無不見此遍一
切處法門彼諸如來無有不宣說者
是故祕密主若人[177] 了知眞言門修菩善
薩行諸菩薩於此遍一切處法門應
勤修學於阿[178] 舸遮吒多波初中後相
加以等持品類相入自然獲得菩提心
行成等正覺及般涅槃有此等所說
字門相與和合眞言法教初中後俱
【第五十二頁】
眞言者若如是知隨其自心而得自在
於此一一句決定意用之以慧覺知當
授無上殊勝句如是一輪[179] 轉字輪眞言者
了知此故常照世世世間如大日世尊而轉法
輪學輪字品第十[180]
[181] 有法門名遍一切處彼[182] 菩薩字位住
時一切所作皆得成就者卽此字輪
法門是遍一切處法門也菩薩若住
【第五十三頁】
此字輪法門者始從發妙菩提心
乃至成佛於是中間所有一切自利
利他種々事業由入此法門故一切皆
得成就無有罣礙也又上來所說阿
闍梨住於佛地者義獨[183] 未了謂此
中字門卽是也最初阿字卽是菩
提之心若觀此字而與相應卽是同
於毘盧遮那法身之體也謂觀此阿
【第五十四頁】
字之輪[184] 如孔雀尾輪光明圍繞行
者而住其中卽是住於佛位也更問
此字輪當作三重於中而置阿字餘
字眷屬在外也更問[185] 又此阿有五種何[186]
々長[187] 又每字輪初先有三重歸命
三寶眞言之心謂阿字娑字嚩字[188] 此
三字顯三部義也阿字是如來部娑
字是蓮華部嚩字是金剛部每三
【第五十五頁】
部隨五字輪而轉隨義相應之相前
言漫荼門[189] 今云輪者卽是漫荼門[190]
義前者壇法中心是大日如來卽同此中阿
字北邊置蓮華及諸眷屬皆在一處

即是此中之娑字南邊置執金剛
及諸眷屬即是此中之囉字也今
從阿字而更生四字即是大悲胎
藏之業[191]也從一囉字轉生多字故
【第五十六頁】
名爲輪也第一阿字即是菩提心體
次有迦佉伽俄伽[192]等五音皆取四字
（各除第五聲）次又取也囉[193]乃至乞叉皆是
男聲悉入阿字輪也行者已發菩
提之心當進修如來之行故次明阿（長）字
輪是行也其三部者謂[194]三字是也次
迦字乃至乞叉亦皆傍角加點用爲
長聲字輪也既已具[195]足如來之行
【第五十七頁】
則成菩提故次明暗糝鑁字輪此三部
也此阿上有點是大空義猶此[196]菩提
之心離一切諸相即名諸佛是成菩提
也次迦字乃至乞叉皆加[197]一點爲暗字
輪也已成菩提當至何所謂大涅
槃故次於此中而明噁索[198]嘆等字
輪也（三部也）如迦乃至乞叉皆傍加二[199]點即
涅槃輪也其噁（長聲）字一字是方便
【第五十八頁】
輪所以中無也此是釋迦佛輪[200]（羯磨部遍入一切輪故無別壇瑜伽）
（云爾）凡字輪大爲三分初阿字即爲一分
次迦乃至廿字爲第二分次也字乃
至訶字爲第三分除去乞叉字由
此字已重故也（謂有迦娑二聲故重也）[201]以上皆
是智慧字也次有伊（上）伊鄔（上）烏醫[202]（加此）
愛惡（多吽反）[203]奧八字即成就三昧
皆是三昧聲也亦隨五輪而恆轉
【第五十九頁】
其義可知[204]有俄（魚可反）若（而可）吒囊（上）莫（慕可）[205]
此字遍一切處謂遍於定慧中也然此
五字亦隨五輪而轉[206]謂加傍點或加
上圓點或加傍二點等此五皆成五字也所
謂字輪者從此輪轉而生諸字也輪
是生義如從阿字一字即轉[207]生四字
謂阿是菩提心[208]（長）是行暗是成菩提
噁是[209]寂涅槃噁（長）是方便如阿字者
【第六十頁】
當知迦字亦五字乃至佉等凡廿字
當知亦爾次有十二字謂伊（上）伊鄔烏嚕
留盧留醫[210]愛烏奧十二字即同字上之
點謂三昧也仰壤拏曩莽亦有五字印[211]（其也）
同上頭之點也羅[212]等八字即同字傍
之二點是除之義也當知此字輪即遍
一切眞言之中若見阿字當知菩提心
義若見長阿字當知修如來行若
【第六十一頁】
見暗字當知成三菩提若見噁字當
知證大涅槃若見長噁字當知是方
便力也若見迦等廿字亦隨義類而演
說之當知此諸字等皆是慧也若見
囉等八字當知即同傍點亦是隨
類相應也（謂羅是無垢等）[213]若見伊等即顯
三昧若見仰等五字當知即大空之
點也大空離一切諸相即是成佛義也
【第六十二頁】
若行者如是了達則[214]能入一切陀羅尼
義旋轉無礙故名爲字輪也如是祕

密主字道門善法眞言道住次第諸
佛初[215]力加持三藐三佛陀道[216]眞言行菩[217]薩
若欲速得古佛之法者應當修學如
是遍一切處法門懃心聽聞思惟修習
由此之故或能一生之中得一切如來種々儛[218]
戲歌詠而悅衆生也初中後相加者
【第六十三頁】
謂阿等五字爲初迦等廿字爲
中羅[219]等八字皆是傍點此諸字皆是
助成字義故後分也凡迦遮吒多波等
皆屬阿字門阿字是菩提心此中初
[220]後相加々[221]者如阿字單是菩提心若傍
角加盡[222]卽是行也此[223]菩提心并行也
若上加點者卽是菩提心并大空離一切
相成菩提也若阿字傍加二點卽[224]菩提心
【第六十四頁】
并除一切障得涅槃也他皆效此而轉
相加或但一義或二或三義可知也或有
阿字上雅[225]無點而其次有字是重字有
其仰壤拏曩莽等是點用加於[226]前卽
是暗字所以爾者此仰等是點用加於
前卽阿字成暗音也或阿字[227]無點其次
有重字有也如迦佉俄伽重加四字用於
仰字爲點也遮車闍社字用壤字爲
【第六十五頁】
點也他放[228]此囉等聲以配於前卽成噁字
也所以然者也囉等皆是傍二點今以
連前阿卽成噁聲也（更審問）夫法體無
言離諸分別戲論復能一切如來
以自在加持神力故成此字輪故能作
如來事利益群品也迦遮吒哆跛三昧
品證菩提心行佛受與并涅槃此等
說字等相加有眞言教初中後具[229]
【第六十六頁】
（此是經文已釋文竟）如是知隨意持誦者決意
一一句用之知竟[230]當授與句無上殊勝者
如是知者卽是一切智々名之差[231]別若行
者如是了知字輪之義卽能所欲皆得
成就以要言之所謂一切皆隨意成者
謂成如來一切事業也若成此者卽是同
於法王於一切法々[232]中而能自在亦得隨本
所願爲一切衆生開淨知見令得佛慧也何
【第六十七頁】
人得此利益謂如理具緣善持誦者故次
云持誦者也誰得此決定意耶謂[233]轉
輪[234]字輪知持誦者常明世間如世尊毘
盧遮那輪轉者如世間之輪若旋運之時
不可知是終始之際無有邊際不可窮盡
當知此二[235]字輪亦復如是從阿字旋轉
出生一切諸字此字輪卽遍一切眞言名
字之中迴轉捻[236]持無有邊際不可盡原遍
【第六十八頁】
一切處卽是百千萬億旋陀羅尼也行
者若能如是了知字輪之義者則能
以此常明而照世間常住之明卽是大日
如來之體同彼毘盧遮那而轉法輪也
（卽是）
此中常明大慧日也此之[237]卽是菩提
之心阿字之體無生無作無有變易非
由造成如是常住實相之慧故名常明也
若行[238]勤功久修無有懈退者決定得之
【第六十九頁】
也然上來所說曼[239]荼羅方軌法用散花

灌頂乃至或授以明鏡如以金錍決其
眼瞙[240]如是等皆爲創發菩提心者以
方便加持次第法用成彼堅固之心作入
佛法之階漸然此中祕旨在於字輪也
所以者何若行者爲人作阿闍梨欲
造立漫荼羅者先謂住於世尊之位謂
以此諸字門而合集成身卽是身同於
【第七十頁】
佛也謂瑜伽阿闍梨觀行成就隨心所作
任運皆成觀此字輪遍布身分猶明見故
同於佛與佛同位也然布字之時當分爲四
分卽是四重漫荼羅也頭爲[241]初分是阿字
本ノ一：
菩提心位從法[242]佉俄伽仰等乃至奢娑訶
凡是第一聲者皆屬菩提之心也當從
行者眉閒白毫相處而觀迦字從於[243]佉
以下當右旋逐日而轉以次一帀[244]布之令環
轉相接次從咽以下爲第二分屬長々[245]阿
【第七十一頁】
字門亦當中與白豪上下相應[246]右行布之二帀[247]
相接此是菩提之行也次從心以下爲第三分
屬暗字門從心上布於[248]字以次右旋二帀[249]相
接次從臍以下屬噁字門是大涅槃亦從
中而置惡[250]字以次右旋二帀[251]令遍也[252]頭爲上
分咽心爲中分齊[253]爲後分私謂發菩提心爲初行254果爲中天寂爲後也
其第五　字遍一切處隨意所作皆得也此在身外
如佛身光隨意而用不在[255]身內布字之位
也[256]字亦爾與噁同也師既如是成身已其漫
【第七十二頁】
荼羅亦如是布之亦當想弟子令如是作之
三事皆成是祕密漫荼羅也若不了達此中
意[257]雖依前事法而作不名善作虛費功夫
亦無所成也又此布字之法是祕密漫荼羅
自非久習眞明之行堪傳授者方以意相
傳不可以文載故師以口相授經所不說但
云如毘盧遮那輪轉也復次行者須知諸
字之色謂初[258]字及迦等廿五字及也囉
【第七十三頁】
乃至訶字皆屬[259]於阿作其黃色所謂金
剛之色[260]第二[261]阿字轉作黃白色所謂寂靜
色也阿字體黃三昧爲白二色合故黃白也
第三加頭上點者亦作黃白色[262]阿字黃
大空白故黃白也次第四[263]噁字轉作
黃白[264]色阿字黃二[265]點涅槃色黑故黃黑
也亦可二[266]點是降伏義猶如涅槃壞滅權[267]
破一切障法此亦如是故二[268]點作黑也第五
【第七十四頁】
噁卽用[269]字者阿字體黃上點卽白傍
卽黑當知卽是種々雜色也凡布漫荼
羅亦爲三重第一重迦字乃至訶用[270]帀[271]
內重名爲金剛輪也此金剛輪持一切法
猶如世界金剛之輪持於世界也卽是
行者最初菩提心輪謂欲堅固菩提
心故先作內重也次第二輪謂阿暗此是長
阿及暗二輪同是中分若同[272]迦[273]爲輪卽不
【第七十五頁】
須用次[274]字輪也私謂是行是因275是證是果也次第三輪用
噁[276]字輪亦順中如上布之令環合也其伊等十
二字在外散布猶如光焰也此卽是三轉
法輪之義也如是布已持誦者卽是持明之
身猶如大日如來神力加持等無有異
此輪亦名因緣輪也師及弟子幷漫荼
羅皆作如是祕密之輪又此諸字卽是

眞言之輪故凡有四種輪也又字輪者梵
【第七十六頁】
音云噁剎囉輪噁剎羅是不動義不動
者所謂是阿字菩提心也如毘盧遮那住
於菩提心體性種々示現普門利益種
々變現無量無邊雖如是垂迹無窮盡
能實常住不動亦無起滅之相猶如車
輪雖復運轉無窮而當中未曾動搖
由不動故能制餘[277]動而無窮極也此阿字
亦復如是以無生故即無動無退而生一切字
【第七十七頁】
轉輪[278]無窮是故名不動輪也若行者能了
達如是不動之輪而布諸明即以其體自然
身有所表無非密印口有所說悉是眞言
凡有見聞觸知之者皆必定於無上菩提
所成福利眞不虛也如能如是即同毘
盧遮那而作佛事常照世間也凡行者
持誦時當觀字輪或爲句輪所謂句輪
者觀本尊心々[279]上有圓明而布眞言之字
【第七十八頁】
輪轉相接令明了現前持誦時觀此字猶[280]
如白乳次第流注入行者口或注其頂相
續不絕遍滿其身乃至遍於支分其國[281]明
中字常明了如常流水而無有盡如是持
誦疲極已即但住於寂心謂觀種子字
也其觀法如上已具說之若得見種子字
已即從種子字中而見本尊也如是
成已即能遍布字輪而成持明之體方
【第七十九頁】
堪作諸事業也如是阿字是不動義
是金剛體凡欲令事堅固不動或令
若自若他道心不動等皆用阿字加
之餘一切字亦隨事相應用之也[282]惠苑
刊定記云輪字品者本疏[283]云日照三藏解
之輪有多義略顯三釋一約字相楞
伽中字輪圓滿猶如象跡故二約所詮是
理圓[284]備如輪滿足三約業用所言不虛
【第八十頁】
如文可知大方廣佛華嚴經入法界品頓
證毘盧遮那法身字輪瑜伽儀軌夫欲頓
入一乘修習[285]毘盧遮那如來法身觀者先
應發起普賢菩薩微妙行願復[286]應
以三密加持身心則能悟入文殊師利大
智慧海然行者最初於空閑處攝
念安心閉目端身結跏趺坐運心普
緣無邊刹海諦觀三世一切如來遍於
【第八十一頁】
一一佛菩薩前慇懃恭敬禮拜旋遶又以
種々供具雲奉獻如是等一切聖衆廣
供脱乎
大[287]養已復應觀自心々本不生自性成
就光明遍照猶如虛空復應深起悲念
哀愍衆生不悟自心輪迴諸趣我當
普禮拔齊[288]令其開悟盡[289]無有餘復應
觀察自心諸衆悉[290]心及諸佛心本無有異
平等一相成大菩提心瑩徹清淨廓然周
【第八十二頁】
遍圓明皎潔成大月輪量等虛空無有
邊際復於月輪內右旋布列四十二梵字悉
皆金色放大光明照徹十方分明顯現一々
光中見無量刹海一一刹海有無量諸
佛一々諸佛有無量聖衆前後圍遶坐
菩提場成等正覺智入三際身遍十方

轉大法輪度脫群品悉令現證無住涅
槃復應悟入般若波羅蜜四十二字門了

【第八十三頁】

一切法皆無所得能觀法界皆悉[291]平等
無異無別々[292]修瑜伽者若能與是旋陀
羅尼觀行相應卽能現證毘盧遮那
如來智身於諸法中得無礙[293]礙評曰
大日經中、有五字輪二百五十觀法及
百字輪布字觀法幷以三十二字爲三十二
相布字觀法華嚴儀軌四十二門布
字觀法幷有圖壇不載此中又昔日

【第八十四頁】

照三藏將來華嚴三昧四十二重華
壇佛像觀行圖壇及以天臺大師法華三昧
四十二位華臺成佛圓融觀行特與此文甚以契
合又大日經五字大漫荼羅及金剛頂五
字旋陀羅尼竝是祕密修證之法門
也已上凡一切梵語皆有字緣字界
之義唯釋此義異說不同也且出一說
俱舍論第九云此中緣起是何句

【第八十五頁】

義鉢剌底是至義醫底界是行
義由先助力界義轉反[294]故行由至轉反[295]
成緣光法師云經部答或[296]有部答依
聲明論有字緣字界其字界若有字
緣來止助卽有種種義起鉢剌底是至
義是字緣醫底男[297]是行義是字界
界是體義此醫底界由先鉢剌底
助力醫底界義轉反[298]成緣若助訖成

【第八十六頁】

緣應言鉢剌底丁履反帝夜與何反[299]此翻名緣
所以然者諸緣勢力起果名行未至之
時未成緣義若緣力至果或諸緣相至
方得名緣故造字家於行界上加至助
緣行成緣義論云[300]參是和合義嗢
是上升義此二是字緣鉢地界是
有義是字界鉢地有界藉前參
嗢[301]合昇[302]字緣助力轉變成起若助訖

【第八十七頁】

成起應言參牟幡[303]陀此翻名起所以
然者明諸有法要與緣合便得上昇[304]
故名爲起故造字家於有界上加合昇[305]
緣有成起義故總結言由此有行法
至於四緣已和合昇[306]起是緣起義云々

【第八十八頁】

嘉應元年十一月十六日書寫了

天保二壬辰孟夏廿日書寫了

天保四癸巳季秋於內山寫之
雖毫甚拙莫於文字有謬焉
花押

1 因みに『聾瞽指歸』・『三教指歸』の「鼈毛先生論」は「余亦充終身之口實」で終わっており、文の結びに類似性が看取される。

2 岡村圭眞師は梵字悉曇のみが他の言語とは異なる眞實の文字であると説く『悉曇字母釋義』を前提に、「しかし、中國の文字の發祥と對比する手法が用いられたために、『字母釋義』と齟齬する見解が見えている。というのも、上表文では梵字悉曇の作者を梵天とし、書祖蒼頡を神人と竝べ稱している點である」と云う（岡村 2015:5）。しかし上表文は「梵天の護り森羅にして」とのみ云っており、梵字悉曇が梵天の所作であるとは云っていない。加えて下に「常住の字」と云っていることは、梵字が梵天の所作ではなく、「本有自然眞實常住の字」とする『悉曇字母釋義』の所説と一致する（『定本弘全』5:111）。梵天は「梵王等、傳受轉教衆生」とあるように『定本弘全』5:101）、梵字の傳達者の役割しか與えられていない。

3 盧：㊏。嘘：『定本弘全』。＊今は字母の文字のみを校合す。以下同じ。

4 ： ㊏。： 『定本弘全』。

5 ： ㊏。： 『定本弘全』。

6 娑：㊏。沙：『定本弘全』。

7 大澤師は非御作説の根據として六説を擧げているが（大澤 2016:10）、その中においても矛盾點が指摘される。

大澤説第二は、書名が「梵字悉曇字母并釋義」であるにも拘わらず、本文中に『悉曇章』とあることと相違すると云う。ここで師は悉曇章を書名すなわち『悉曇十八章』（『大悉曇章』）と見作す。しかし、『悉曇字母釋義』に云う「梵王下來授以此悉曇章」、「悉曇羅窣覩二合　右四字題目。梵云悉曇囉窣覩。唐云成就吉祥章」、「都有一萬三千八百七十二字。此悉曇章本有自然眞實不變常住之也」とは「悉曇章」そのもののことであって、書名を意味していない。また『悉曇十八章』は大師が説明する如く各字母に十二轉があり、更に二合・三合に展開して一萬有余の字數となる。しかし、『悉曇字母釋義』は「字母」と云っており、實際に本文中には五十の字母のみを載せるのであり、タイトルと本文の内容は一致する。

大澤説第三の「總持」に關して、『悉曇字母釋義』は「教文・法・義・功德」とするが、『般若心經祕鍵』は「總持に文義忍呪あり」として相違があると云う。しかし、『悉曇字母釋義』には「此總持略有四種。一法陀羅尼。二義陀羅尼。三呪陀羅尼。四菩薩忍陀羅尼」とあり、更に法陀羅尼に關して「名句文身之所攝錄」と云う（『定本弘全』1:102）。この箇所は『瑜伽地論・卷第四十五』本地分中菩薩地第十五初持瑜伽處菩提分品第十七之二からの引用であり（大正 30:542c17-542c23）、『梵字悉曇字母并釋義』に「已上四種者、瑜伽・佛地等論、且約人釋」と云う「瑜伽（師地論）」とは、當該箇所のことであろう。

その「名句文身」とは「名 nāman」・「句 pada」・「文 vyañjana」それぞれの「身 kāya」のことであり、從って『般若心經祕鍵』の「文」とは名・句・文の三つを「文」に代表させたものである。結局、『悉曇字母釋義』と『般若心經祕鍵』に説く四種の總持は全同である。

大澤説第六は、「匠不空三藏」という用語が『廣付法傳』と『眞言付法傳』において發見できないと云って、「匠」を問題視する。しかし『悉曇字母釋義』の當該箇所は「傳眞言之匠不空三藏等」（眞言を傳ふる（之）匠の不空三藏等は）であり、「匠不空三藏」で一まとまりの用語ではない。また大師の著作における「匠」の用例は、『御請來目錄』に「或源或派、古之法匠、泳派攀業」（『定本弘全』1:18）、『辨顯密二教論』に「先匠所傳、皆是顯教」（『定本弘全』3:76）、『般若心經祕鍵』に「若然、前來法匠、何不吐斯言」（『定本弘全』3:5）が擧げられる。

8 『大智度論』の當該箇所における阿字から茶字は、南宋・法雲『翻譯名義集』に引用されている（大正 54:1132c15-1136c3）。

9 同様に、『悉曇字母釋義』序文冒頭の『西遊記』の引用は、『悉曇字記』を參考にして、大師が實際に『西遊記』を繙いて、詳しく引用しなおしていると思われる。大師が玄奘三藏『西遊記』を讀んでいたであろうことは、

『廣付法傳・第三問答決疑』によって知られる。

10 om.：㊟。之：㊤『定本弘全』。
11 熱：㊟は「熱」の俗字の「埶」に作る。
12 矯：高大本は右旁を俗字の「高」に作る。
13 迦字六：この三字、頭注に記す。今、本文に補う。
14 剌：㊟。辣：㊤『大般若經』。
15 九：「卅」とすべきか。以下同様。
16 摝：本文は「摝」に作る。頭注に他本として「摝」字を擧げる。今は㊤『大般若經』と同じ「摝」を採る（T5: 302c9）。
17 拏：㊟。拏：㊤『大般若經』。
18 酌：本文は右旁を「勾（句）」に作り、頭注に「酌乎」と云う。今は頭注に從って改める。
19 善現：具壽善現のこと。『大般若經』における世尊の對辨者。
20 枝：㊟㊏。支：㊤。
21 娑：㊟。沙：㊤㊏。
22 六：㊟㊤。大：㊏。
23 折：㊟㊤。制：㊏。
24 婆：㊟㊏。娑：㊤。㊟は頭注に「娑乎」と云う。
25 諸法時來轉故：㊟㊤。om.：㊏。
26 麼：㊟㊏。磨：㊤。㊟は「幺」の右傍に「本石」と云て「磨」とする。
27 簸：㊟㊏。敗：㊤。
28 簸：㊟㊏。敗：㊤。
29 呿：㊟㊤。坐：㊏。
30 枹(s.e.)：㊟。拕：㊤。他：㊏。㊟は「施」に書し、頭注に「枹乎」と云う。今は頭注に從うが、どちらも誤寫であろう。
31 施(s.e.)：㊟。拕：㊤。他：㊏。
32 摩：㊟㊤。魔：㊏。
33 摩：㊟㊤。魔：㊏。
34 後：㊟。厚：㊤。
35 他：㊟㊤。他土茶反：㊏。
36 咤：㊟㊤。吒：㊏。
37 傴：㊟㊤。驅：㊏。
38 om.：㊟。故：㊤㊏。
39 不可得：㊟。om.：㊤㊏。
40 故：㊟。om.：㊤㊏。
41 得：㊟。說：㊤㊏。
42 等：㊟。礙：㊤㊏。
43 不：㊟。om.：㊤㊏。
44 亦：㊟。om.：㊤㊏。
45 書：㊟㊤。盡：㊏。
46 持：㊟㊤。第：㊏。
47 諸：㊟。諸餘：大正藏・㊏。
48 得無增減：㊟。無增無減：㊤。無增減：㊏。
49 衆(s.e.)：㊟。陰：㊤㊏。
50 巧能：㊟。能巧：㊤。能：㊏。
51 是：㊟。om.：㊤㊏。
52 衆生來：㊟。往來：㊤㊏。
53 以下、㊏巻第六は『大智度論』を引かず、「評曰」として『大日經』を引いて「據『大日經』此等字義、卽是遍一切處善巧法門。故知卽是入印經中遍一切處。音聲惠之法門也」と記す（T84:426b19-21）。おそらく安然師の獨自の解釋と思われる。
54 故：㊟。以：㊤。
55 因：㊟は俗字の「曰」に記し、「イン」のルビを振る。
56 若：㊟は右傍に書き改める。
57 荼：㊟は右傍に書き改める。
58 苦：㊟。垢：㊤。
59 利：㊟。梨：㊤。
60 闍：㊟は右傍に書き改める。
61 々：㊟。知：㊤。
62 鄣(s.e.)：㊟。障：㊤。
63 邏：㊟。羅：㊤。㊟は右傍に「邏」を書き改める。
64 娑：㊟。薩：㊤。
65 魔：㊟。礙：㊤。
66 々：㊟。om.：㊤。
67 他：㊟。陀：㊤。
68 他：㊟。陀(s.e.)：㊤。
69 波：㊟。簸(s.e.)：㊤。
70 故：㊟。om.：㊤。
71 ㊟はここに「一切」を記して見せ消ちし、頭注にて「一切衍」と云って省くべきことを示す。
72 何：㊟。阿：㊤。
73 利：㊟。om.：㊤。
74 焱：㊟。麼：㊤。
75 焱：㊟。麼：㊤。
76 抱：㊟。施：㊤。
77 未：㊟。末：㊤。

78 土：㊟。上(s.e.)：㊇。
79 多：㊟。吒：㊇。
80 多：㊟。吒：㊇。
81 秦：㊟は「禾」旁を「言」に誤り、左に○を記し、右傍に「秦」と記す。
82 故：㊟。om.：㊇。
83 廿：㊟。二十：㊇。
84 om.：㊟。故心得：㊇。
85 字：㊟は右傍に書き改める。
86 折：㊟。破：㊇。
87 嘆：㊟。歎：㊇。
88 毘：㊟。韓：㊇。
89 或三十日：㊟。om.：㊇。
90 閏：㊟は右傍に書き改める。
91 如夢如幻：㊟。如幻如夢：㊇。
92 ㊇はここに「大智度論卷第四十八」あり。
93 釋第十八品竟：㊟。釋第十九品：明本。釋第十八品：聖。釋第八品竟：石。
94 om.：㊟。善男子。當善學分別：㊇。
95 二：㊟は右傍に書き改める。
96 門：㊟は本文に見せ消ちして、頭注に「門」と記す。
97 om.：㊟。四十二字：㊇。
98 om.：㊟。無：㊇。
99 四：「日」の誤寫と思われる。
100 論釋四(日)：㊟。四十二字義如摩訶衍中說：㊇。
101 大日經：㊟。二現字形大日經：㊏。
102 om.：㊟。諸：㊇㊏。
103 相：㊟。想：㊇㊏。
104 om.：㊟。娑：㊏。
105 々：㊟。咤：㊇。
106 摩：㊟。麼：㊇。
107 羅：㊟㊏。邏：㊇。
108 々(add.)：㊟。om.：㊇㊏。
109 顯：㊟は頭注に「顯」を書き直す。
110 哦：㊟㊏。誐：㊇。
111 現：㊟は右傍に書き直す。
112 遮：㊇。『御作』は「脫遮乎」と正確な推測を云う。今、補う。
113 om.：㊟。字：㊇㊏。
114 社：㊟㊏。社上聲呼：㊇。
115 吒(s.e.)：㊟。咤：㊇㊏。
116 一切法：㊟㊇。一切法諸法(add.)：㊏。
117 噂(s.e.)：㊟。拏：㊇㊏。
118 又：『御作』。決(s.e.)：㊏イ。
119 阿字是假立(add.)：㊟。om.：㊇㊏。
120 om.：㊟㊏。位：㊇。
121 位：㊟。住：㊇㊏。
122 位：㊟。住：㊇㊏。
123 門(s.e.)：㊟。所：㊇㊏。
124 何(s.e.)：㊟。阿：㊇㊏。
125 om.：㊟㊏。也：㊇。
126 此縛：㊟㊏。om.：㊇。
127 之：㊟。之義：㊇。是：㊏。
128 告：㊟。言：㊇㊏。
129 om.：㊟。有：㊇㊏。
130 om.：㊟。言：㊇㊏。
131 om.：㊟。行：㊇㊏。
132 迦：㊟㊏。迦ᳬ：㊇。
133 々(add.)：㊟。om.：㊇㊏。
134 何(s.e.)：㊟。阿：㊇㊏。
135 『大日經疏』の阿字の解釋の終わり（大正39:774b15）。㊟は以下の字母の解釋を省く。しかし、㊏は大正（39:774b15）以下の字母の解釋も載せる。
136 丈(add.)：㊟。om.：㊇㊏。
137 阿字乃至訶字：㊟㊏。仰壤拏曩莽：大正藏。＊決定的な異同。
138 入：㊟。om.：㊇㊏。
139 om.：㊟。是：㊇。之：㊏。
140 羅：㊟。囉：㊇㊏。
141 故(s.e.)：㊟。五：㊇。
142 知：㊟。om.：㊇㊏。
143 ㊏に「第六字義入門有三評曰一釋義門。二現字形。三觀字輪」とある（T84:419c16-17）。㊏によれば、「二現字形」は『大日經』百字持誦品であり（T84:426b22）、先に既出である。ここから、當該箇所の『大日經』字輪品が「三觀字輪」として引用されていることが推測される。
144 囉：㊟㊏。囉二合：㊇。
145 呼：㊟。囉之：㊇。下に「長呼之」とあるゆえ、「之」はあった方が良い。
146 om.：㊟。喃：㊇㊏。
147 嚩：㊟㊏。伐：㊇。
148 om.：㊟。折：㊇㊏。

149 哦：御。誐：大。
150 哆：御。多：大藏。
151 乞：御。吃：大藏。
152 齕：大。御は「肉＋占」に作るが、誤寫と見作される。喃：藏。
153 嗢：御大。諂：藏。
154 鑁：御。諂：大。
155 甜：御藏。頷：大。
156 om.：御。吃衫：大藏。
157 沒：御藏。勃：大。
158 沒：御藏。勃：大。
159 囀：御。伐折：大。囀日：藏。
160 嘆：御藏。莫：大。
161 屬：御大は共に俗字の「屬」を用いる。
162 噓(s.e.)：御。噱：大藏。
163 磔：御は右旁を「栞」に作るが、これは「桀」の俗字の「粲」などを誤寫したものと思われる。今は「磔」に見作す。
164 擇：御は俗字の「臬」を誤寫する。
165 咀：御藏。咀(alt.)：大。
166 om.：御藏。索：大。
167 矐：御藏。臛：大。
168 二(s.e.)：御。右旁に「一」と記す。一：大藏。
169 縊：大藏。御は「口＋縊」とする。誤寫と思われる。今は「縊」にて代替する。
170 哩：御藏。哩：大。
171 汗(s.e.)：御大。汚：藏。
172 攘：御藏。壤：大。
173 大はここに「搦」字あり。衍文と思われる。
174 この箇所に頭注あり、「恐脱未乎」と記される。下に見る「來」を「未來」と見作すべきことを云う。
175 om.：御。未：大。頭注の「恐脱未乎」とはこの箇所を指している。
176 々(add.)：御。om.：大藏。
177 人(s.e.)：御。欲：大藏。
178 阿：御。om.：大藏。
179 om.：御。輪：大。
180 學字輪品第十：御藏。祕密漫荼羅品第十一：大。大は次の一品のタイトルを記している。
181 以下、【引用⑩】『大日經疏』字輪品第十（T39:722c14-725b13）。
182 彼：御大。修：藏。
183 獨：御。猶：大藏。
184 如：御。猶如：大藏。
185 om.：御。此字輪當作三重。於中而置阿字。餘字眷屬在外也更問藏。御の書き漏れと思われる。
186 何(s.e.)：御。阿：大藏。
187 om.：御。暗惡惡長：仁和寺本『大日經疏』（平安末寫）藏。
188 om.：御藏。即：大。
189 門(s.e.)：御。羅：大藏。
190 門(s.e.)：御。羅：大藏。
191 業：御藏。葉：大。
192 迦佉伽俄伽(s.e.)：御。迦佉(om.)哦(s.e.)伽(s.e.)：大。迦佉伽俄仰：藏。藏が正しいと思われる。
193 囉：御大。羅：藏。
194 om.：御藏。阿沙囀：大。
195 具：御は「㝵」と書き、見せ消ちして「具」に改める。
196 此：御大。om.：藏。
197 om.：御。上：大。
198 索：御大。嗦：藏。
199 二：御大。：：藏。
200 om.：御藏。也：大。
201 娑：御大。沙：藏。
202 譬：御藏。翳：大。
203 吽反：御。om.：大。
204 om.：御。次：大藏。
205 慕：御藏。莫(s.e.)：大。
206 轉：御は左旁を誤寫し、左傍に書き直す。
207 轉：御藏。來：大。
208 om.：御。阿：大藏。
209 om.：御。大：大藏。
210 譬：御藏。翳：大。
211 印(s.e.)：御。即：大藏。
212 羅(s.e.)：御。囉：大藏。
213 羅：御大。囉藏。
214 則：御藏。即：大。
215 初：御藏。神：大。
216 以下、T39:723c22「菩薩行舞者、經云」（T39:723b22）以降「當知即是告一切大會也。謂彼」（T39:723c22）の部分が割愛されている。藏は当該箇所を割愛せずに載せる。

217 菩：㊀は「者」を見せ消ちして「菩」に改める。
218 儛：㊀。舞 (alt.)：㊇。
219 羅：㊀。囉：㊇。
220 om.：㊀。中：㊇。
221 々：㊀。om.：㊇。
222 盡 (s.e.)：㊀。畫：㊇。㊀は「點」を見せ消ちして「盡」に改める。
223 也此：㊀。此是：㊇。也此是：㊈。
224 om.：㊀。是：㊇。
225 雅 (s.e.)：㊀。雖：㊇。
226 是點用加於 (s.e.)：㊀。聲以此連：㊇。「是點用加於」の五字、次行を謝って記す。
227 字：㊀は「等」を見せ消ちして「字」に改める。
228 放：㊀㊈。效：㊇。
229 具：㊀。俱：㊇㊈。
230 竟：㊀。覺：㊇㊈。
231 差：㊀ははじめ誤寫し、左傍に書き直す。
232 々 (add.)：㊀。om.：㊇㊈。
233 この箇所、㊀は「有慧之人、善覺了識知字輪義故、隨於阿等諸字一一字門隨所修行、決定悉皆得成菩提之果、勿生疑惑也。此中覺知何法。謂如阿字是菩提心、加點卽是菩提行。加於大空卽成佛也。若菩提心清淨除一切蓋障、卽是大般涅槃、更無他義也。如是等一一通達了知、卽是受得無上殊勝之句。無上句卽是成菩提也。此無上菩提之心、卽是諸佛自然之智、實無有能授與之者、但行者方便具足善知字輪之義、自然得之、卽是授與無上菩提也。如是一輪」を缺く。㊈は當該箇所を割愛せずに載せる（大正 84: 430a6-17）。
234 轉輪：㊀。輪轉：㊇㊈。
235 此二：㊀。此一一：㊇。一一：㊈。
236 捻 (s.e.)：㊀。總：㊇。㊀は「摠」の俗字「捻」を誤寫したと思われる。
237 之：㊀。曰：㊇。
238 om.：㊀。者：㊇㊈。
239 曼：㊀㊈。漫：㊇。
240 暝：㊀㊈・仁和寺平安末本『大日經疏』。暎 (s.e.)：㊇（仁和寺嘉保二年本）。『七佛八菩薩所說大陀羅尼神呪經』「二者、如以金鈑決其眼暝、令覩光明」（大正 21:555b16-17）。『金剛鈑顯性錄』「卽以金鈑決其眼暝、以一指示之」（卍續藏 56:515b）。
241 爲：㊀は「以」を見せ消ちして「爲」に改める。
242 法 (s.e.)：㊀。迦：㊇㊈。
243 於：㊀㊈。om.：㊇。
244 帀：㊀は俗字の「迊」に作る。
245 々 (add.)：㊀。om.：㊇㊈。
246 應：㊀。連：㊇。
247 帀：㊀は俗字の「迊」に作る。
248 丸：㊀。欠：㊇。ぁ：㊈。
249 帀：㊀は俗字の「迊」に作る。
250 惡：㊀㊈。迦入：㊇。
251 帀：㊀は俗字の「迊」に作る。
252 令遍也：㊀。相接：㊇。
253 齊：㊀。臍：㊇㊈。
254 天 (s.e.)：㊀。大：㊇㊈。
255 在：㊀は「以」を見せ消ちして「爲」に改める。
256 om.：㊀。闇：㊇。迦：㊈。
257 om.：㊀。趣：㊇㊈。
258 丸：㊀。阿：㊇。
259 屬：㊀ははじめ本文に記し、それを打ち消して右傍に書き直す。
260 om.：㊀。也：㊇㊈。
261 om.：㊀㊇。丸：㊈。
262 om.：㊀。暗也：㊇。也丸：㊈。
263 丸惡：㊀㊈。惡：㊇。
264 黃白：㊀。黃黑：㊇。㊀は右傍に「黃黑」と記す。
265 二：㊀㊇。：：㊈。
266 二：㊀㊇。：：㊈。
267 權：㊀。摧：㊇㊈。㊀は「權」の俗字の「權」に作る。
268 二：㊀㊇。：：㊈。
269 噁卽用丸：㊀。om.：大正藏。噁卽用噁：㊈。丸：丸の誤寫と思われる。
270 用 (s.e.)：㊀。周：㊇㊈。
271 帀：㊀は俗字の「迊」に作る。
272 同 (s.e.)：㊀。用：㊇㊈。
273 迦：㊀㊇。阿引：㊈。
274 次：㊀。欠：㊇。暗：㊈。
275 謂：㊀。謂迦：㊇。謂阿引：㊈。是：㊇：㊈。者：大正藏。因：㊀。因欠：㊇。因暗：㊈。
276 噁：㊀㊈。惡：㊇。
277 餘：㊀。群：㊇。

278 轉輪：㊟。輪轉：大藏。
279 心々：㊟藏。心：大。
280 猶：㊟は「輪」を見せ消ちして「猶」に改める。
281 國(s.e.)：㊟。圓：大藏。
282 以下、【引用⑪】『續華嚴略疏刊定記』。
283 本疏：澄觀師『大方廣佛華嚴經疏』のこと。「今初、言輪字品莊嚴法門者、賢首引日照三藏解云、輪有多義。一約字相、楞伽中云、字輪圓滿猶如象迹等。二約所詮、盡理圓備如輪滿足。三約用、謂妙音陀羅尼有轉授義滅惑義。如法輪等、卽輪字教法詮示莊嚴。此釋已佳」（T35, No.1735: 927a18-24）。
284 om.：㊟。滿周：藏。
285 修習：㊟は「如來」と書き、左傍に。を記して、右傍に「修習」と訂正する。
286 復：㊟大。後：藏。
287 供：㊟は「養」の右上に「供脫乎」と記す。
288 齊：㊟。濟：大藏。
289 盡：㊟は右傍に書き直す。
290 悉(s.e.)：㊟。生：大藏。
291 皆悉：㊟。悉皆：大藏。
292 々(add.)：㊟。om.：大藏。
293 鄣(s.e.)：㊟。障：大藏。
294 反：㊟。變：大。
295 反：㊟。變：大。
296 或：㊟。或說一切：大。
297 男(s.e.)：㊟。界：大。
298 反：㊟。變：大。
299 臾：㊟。反：大。
300 論云：㊟。om.：大。
301 嗢：㊟。唱：大。
302 昇：㊟。升：大。
303 幡：㊟。播：大。
304 昇：㊟。升：大。
305 昇：㊟。升：大。
306 昇：㊟。升：大。

＜参考文獻＞
苫米地誠一 1986「『梵字悉曇字母并釋義』をめぐって」『印度學佛教學研究』35(1)、177-179。
月本雅幸 1994「仁和寺藏梵字悉曇字母并釋義 治暦四年點」『訓點語と訓點資料』93: 41-71。
大柴清圓 2014「『古今文字讚』の研究―翻刻・校訂を中心に― 付・人間文化研究機構國立國語研究所所藏『古今文字讚』（影印本）」『高野山大學密教文化研究所紀要』27:184(77)-142(119)。
大柴清圓 2015「京都毘沙門堂所藏『（古今）篆隸文體』の研究（上）―翻刻・校訂篇―」『密教文化　高野山開創1200年記念號』235:244(35)-217(62)。
岡村圭眞 2015「『梵字悉曇字母并釋義』について」『空海研究』2:1-13。
大澤聖寛 2016「『梵字悉曇字母并釋義』の疑問」『豐山學報』59:1-14。
大柴清圓 2016「『梵字并びに雜文を獻ずる表』（『性靈集』卷第四）における「梁武帝草書評一卷」について　付　京都國立博物館所藏・沈粲書『梁武帝草書狀（影印本）』」『密教文化』237:166(5)-145(26)。

＜キーワード＞
空海。梵字悉曇字母并釋義。悉曇釋。悉曇藏。梵字并びに雜文を獻ずる表。運敞。安然。